

特別な支援を必要とする子ども達のよりよい移行支援をめざして：幼・小連携を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本杉, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007731

特別な支援を必要とする子ども達のよりよい移行支援をめざして

—幼・小連携を通して—

本杉 和美

Improving Transitional Support for Children with Special Educational Needs:

Coordination of Preschool and Elementary School

Kazumi MOTOSUGI

1 問題の所在と目的

小学校では、入学したばかりの1年生が、集団活動がスムーズに行えなかったり、学校生活のルールが理解できなかったりすることから、集団行動が取れない、授業中に座ってられない、話を聞かないなどの状態が数カ月継続する「小1プロブレム」という現象が話題になっている。この背景としては、家庭の教育力の低下や少子高齢化など、社会や家庭生活を取り巻く環境の変化が挙げられている。このような状況を踏まえ、平成20年1月の「中央教育審議会答申」では、子どもの発達幼児期とそれ以降で連続しており、幼稚園教育の成果を小学校教育につないでいくことが重要であるとしている。

ただ、遊びを中心とした幼児期の教育と教科等を中心とする小学校教育では、教育内容や指導方法が異なることから、特別な支援を必要とする子ども達にとっては健常の子ども達以上に小学校入学後の生活の変化に対応できないことが指摘されている。赤塚(2007)は、障害がある子ども達にとって特に手厚い移行支援が求められる時期の一つが、「学校教育への移行である就学の時期」と述べている。幼児期の生活や支援をどのように就学時に引き継いでいくかということに重点を置きながら、子どもと保護者が安心した環境の中で、子どもの育ちを保障する支援を行っていくことが課題であると言える。

そこで、本研究では、よりよい移行支援を図1のようにとらえ、「支援ツール」(就学支援シートやサポートファイルなど)と「支援システム」(幼稚園の訪問や情報交換会、接続期カリキュラムなど)の2つの視点を中心に、特別な支援を必要とする子ども達への有効な支援方法について探っていきたいと考えた。

幼稚園から小学校へのよりよい移行支援とは



図1 幼稚園から小学校へのスムーズな移行のイメージ

2 研究の方法

第一段階として、D市の幼稚園や小学校を対象として質問紙調査を実施する。質問紙調査では、「気になる子・障害のある子の観察のための幼稚園の訪問」「幼稚園と小学校との子ども同士の交流」「気になる子・障害のある子の実態や支援方法を記した個別の教育支援計画や就学支援シートの提出」など7項目についての取り組みの現状について調査したり、「幼小連携における教職員の意識」や「幼小連携に関して最も重要だと思われる取り組みについての意識」を調査したりする。

第二段階として、実習校のD市立E幼稚園、D市立F小学校での実践を通して、「支援ツール」「支援システム」の2つに視点をあて、有効な支援方法を探っていく。支援ツールとしては、E幼稚園にて事例児Aの就学支援シートを作成し、F小学校に引き継ぐ。支援システムとしては、E幼稚園やF小学校で行わ

れた幼稚園の訪問や情報交換会、近隣校研修、就学時健診の実施状況、効果を調査する。また、幼稚園での取り組みが小学校での事例児Aのあらわれにどのようにつながったかを横浜市版アプローチカリキュラ
の考え方をもとに整理する。

3 質問紙調査から見てきた幼小連携の現状と課題

特別な支援を必要とする子ども達の幼稚園から小学校への移行に関する現状と課題を明らかにするために、D市内の幼稚園と小学校を対象に質問紙調査を実施した。

(1) 幼小連携における教職員の意識

幼稚園と小学校で、「連携がうまくいっている」「連携がまあまあうまくいっている」と回答している割合に相違は見られないが、幼稚園にくらべて小学校は「連携がうまくいっていない」と回答している割合が10%多かった(図2)。理由を見ると、「必要な

情報を十分に得ることができない。」「幼稚園からもらう情報と入学後の児童の様子が違う。」など、入学児童

に関して、必要な情報を得られていないと回答している小学校が30校ほどあった。「幼稚園の訪問」や「情報交換会」などで得られる情報の質や量を高めていく必要があると考えられる。

(2) 小学校進学後の観察の重要性

「連携がうまくいっていない」「連携があまりうまくいっていない」と回答した幼稚園の理由を見ると、「情報提供はしているが、入学後の子ども達の様子が小学校から伝わってこない。」「小学校からの連絡や問い合わせがない。」という回答が挙げられている。「小学校進学後の観察」について、小学校では58.1%で実施しておらず、そのうち16.2%で幼稚園からの希望があれば行う予定であると回答していた。小学校進学後の観察の中で、幼稚園からもらった情報の活用状況や入学後の子ども達の様子を、幼稚園と小学校とで共有していくことが重要であると考えられる。

(3) サポートファイルや個別の教育支援計画の提出や活用の推進

サポートファイルの提出や活用、個別の教育支援計画や就学支援シートの提出や活用について、「おおいに重要である」「やや重要である」と回答している幼稚園や小学校は、94校中それぞれ86校と82校であった。意識の高さとは裏腹に、保護者からサポートファイルの提出があり、活用している幼稚園や小学校は96校の園や学校のうち、16校であった。個別の教育支援計画や就学支援シートの作成、提出を行い、活用している幼稚園や小学校は19校であった。どちらの項目においても、約70校の幼稚園や小学校で活用されていない現状がわかった。重要であると認識しているにもかかわらず活用が進んでいない理由としては、サポートファイルについて、保護者や園、学校に周知されていないことが推測される。個別の教育支援計画や就学支援シートについては、作成に時間や労力を使うのにもかかわらず、どのように活用されたのかは認識されていないのではないかと考えられる。小学校側に情報がうまく伝えるための就学支援シートの項目や内容、活用方法について明らかにすることが重要であると考えられる。

(4) 効果的な交流活動の実践

子ども同士の交流の取り組みに対する意識と幼小連携における教職員の意識が、相関関係にあるかどうか

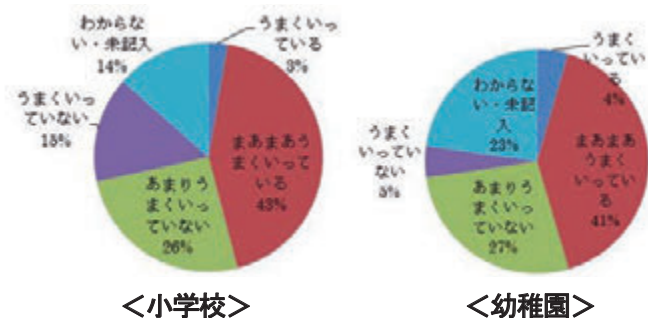


図2 幼小連携における教職員の意識について

か見てみると表1のような結果となった。幼小連携がうまくいっているととらえている小学校や幼稚園は、子ども同士の交流を重要だと考えていることがわかった。ただ、「あまり重要でない」「まったく重要でない」と回答した幼稚園はなかったのにもかかわらず、41.9%の小学校は「あまり重要でない」「まったく重要でない」と回答していた。無藤(2009)は、交流にあたっては必ず相互にとって教育的意義、ねらいをはっきりさせることが大事であると述べている。交流の有効性を相互が理解をし、交流を通して子どもだけでなく職員同士が相手を理解し合うことが重要であると考えられる。

表1 子ども同士の交流の取り組みに対する意識と幼小連携における意識の相関関係表

相関係数		
		取り組みに対する意識について ＜子ども同士の交流＞
幼小連携における小学校と幼稚園の教職員の意識	Pearson の相関係数	.343**
	有意確率(両側)	.002
	N	80

**．相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

4 実習校での実践①～支援ツールについて～

(1) 事例児Aのプロフィール

小学1年男子児童。実習校であるE幼稚園からF小学校特別支援学級に入級した。知的発達や言葉に遅れが見られる。

(2) 就学支援シートの作成

20XX+1年2月から3月にかけてE幼稚園の教師と共に事例児Aの就学支援シートを作成した。D市教育委員会から小・中学校対象に出された「個別の教育支援計画作成の手引き」を参考に、幼児の実態や支援方法がより伝わりやすいようにE幼稚園が独自にアセスメントの項目を立てたものである。20XX年の年度当初に担任が作成した個別の教育支援計画をもとに、小学校入学を考慮して実態や支援方法を再検討し、就学支援シートとして20XX+1年4月にF小学校に引き継いだ。

(3) 就学支援シートの活用

20XX+1年5月下旬に事例児Aの担任教師に就学支援シートの活用についてインタビューを実施した。表2がその結果である。

表2 就学支援シート活用についての小学校担任へのインタビューの結果

	インタビューの項目	インタビューの結果
①	就学支援シートを生かすことができたか。	・早期にもらえたことで、全体像をつかむことができた。細かいところまでわからなくても、だいたいこんな子であるということをつかむことができる。
③	小学校での支援に具体的にどのように生かすことができたか。	・就学支援シートの「はさみを使った活動は、一回切りで、連続切りは難しい。」という内容を見て、一回切りで切ることができる短冊状の折り紙を用意した。 ・「小動物など、自然に興味を持ち・・・」という内容を見て、入学してすぐにザリガニを見に行く活動を取り入れた。 ・「ゲーム的な遊びは難しいが、ごっこ遊びを好み・・・」という内容から、体育や休み時間に特別支援学級の上級生と一緒に鬼ごっこを行った。
④	幼稚園での様子を伝えるための項目の立て方について変更した方が良いところがあるか。	・項目は良い。小学校版の項目を変更したことにより、実態をとらえやすくなっている。 ・「ことばの理解」のところに書字の実態が入るとさらに良い。

就学支援シートがあることによって、得意なことや好きな物の把握をすることができ、入学後の活動を考える上で参考になったことがわかる。また、「生かしたいこと」や「支援が必要なこと」の欄からは幼稚園で行ってきた支援方法が伝わり、小学校での環境設定や言葉の掛け方に生かすことができた。例えば、

わかりやすいようにロッカーを端にしたり、視力が悪いことを考慮して席を一番前の中央にしたりなどである。事例児Aの実態や興味を把握して小学校生活の活動や環境に生かすことができたことにより、事例児Aにとって幼稚園から小学校への段差が小さくなり、安心感を持つことにつながったと考えられる。

小学校での事例児Aへの支援は、就学支援シートで得られた情報と体験入級や幼稚園での訪問、入学説明会の際の上級生との交流での観察とを併せて考えられてきた。ただ、形として残る就学支援シートがあることによって、幼稚園での支援を継続することができ、事例児Aに関わる多くの教師が早期から実態をつかむことができたと言える。

（４）子ども達の実態と支援をつなぐ就学支援シート

表3は、子ども達の情報をつなぐための就学支援シートの例として提案するものである。今回実践した就学支援シートのアセスメントの項目に学習面についての「文字や数の理解」を加えた。「生かしたいこと」の欄に興味があることや好きなこと、こだわりを記入することによって、小学校での活動内容や支援方法を考える際の参考になる。また、「支援が必要なこと」の欄に、もう少しでできそうなことを支援方法と一緒に記入することによって、幼稚園と小学校の活動や支援が細切れにならずに、子ども達の成長を滑らかに促すことができると考える。今後も、発達支援障害者支援センターや特別支援学校が中心となって、就学支援シートや個別の教育支援計画の書き方を伝え、書けるようになった幼稚園の教師が他の教師に伝えていくことが重要だと考える。また、小学校の教師が幼稚園の教師に就学支援シートによって得た情報をどのように活用したのかを支援システムの中で伝えていくことによって、就学支援シートの提出が幼稚園から小学校の移行の際の継続した取り組みになっていくと考える。

表3 就学支援シートの例

就学支援シート (市立 幼稚園)				
氏名	性別	生年月日	学年・級	担任
アセスメント				
発達検査の結果・保護者の説明	園庭	生かしたいこと	支援が必要なこと	
学習活動				
生活の活動				
友達関係・集団生活				
異性・ことばの理解				
文字や数の理解				
こだわり				
保護者の支援				
家庭・地域	保護・福祉	学校	医療	その他
保護者の願い				
支援方針				

5 実習校での実践②～支援システムについて～

（１）支援システムの内容

①幼稚園の訪問において

20XX年度、F小学校は行事の参観、研究保育、公開保育日などの機会を利用し、4回以上に渡ってE幼稚園を訪問した。年長児を中心に、事例児Aや事例児B（外国籍の児童であり、通常学級に就学予定である）の集団の中での関わり方や行動面の特徴などを観察した。

②幼稚園と小学校との情報交換会において

20XX+1年3月、E幼稚園とF小学校の間で情報交換会が行われた。保護者に承諾を得た上で、特別な支援が必要だと考えられる幼児について、幼稚園でのあられや支援の方法について小学校の教師に伝えた。主には、行動面への支援が必要な幼児に加えて、食べ物に関してアレルギーや好き嫌いがある幼児についての情報であった。小学校の教師からは、学級編制の際に留意すべき点についての質問があった。

③近隣校研修において

20XX+1 年 10 月、E 幼稚園の教師をはじめ、近隣の小学校や特別支援学校の教師が F 小学校を訪問し、1 年生の算数の授業を参観、事後研修に参加した。E 幼稚園の教師は、小学校へと環境を移した子ども達の様子を参観した。

④就学時健診において

20XX+1 年 11 月に来年度入学予定の幼児を対象に、F 小学校では、発達検査や内科、歯科などの検診が行われた。健診後の校内就学指導委員会では、検診の際指示が通りにくかった幼児、発達検査の結果が思わしくなかった幼児などについて情報交換が行われた。また、就学先を通常学級か特別支援学級かで悩んでいる保護者との面談も行われた。

（２）子ども達の実態と支援をつなぐ支援システム

幼稚園の訪問や情報交換会の中で幼稚園から得られた「具体的な問題行動や対処方法」「家庭の様子や親の姿勢、考え方」「学級編制の際に配慮すること」などの情報は、小学校での支援にすぐに生かすことができると言える。ただ、伝えられる情報には限りがあるため、自分の思いや要求を表出することを苦手とする幼児については情報を送ることを見落としがちである。小学校進学後の観察や近隣校研修を 5～6 月の早い時期に行うことができると、入学後の児童の様子を幼稚園教師と小学校教師で観察し、支援が必要な児童の支援方法を幼児期の発達過程も含めて考えることができる。また、幼稚園から得られた情報の生かし方、情報と入学後のあらわれの相違点などを両者で共有することにより、幼稚園教師が入学後の子ども達の姿を想像する力、幼稚園教師と小学校教師が必要な情報を見極める力へとつながり、継続した連携へと発展していくと考える。

6 幼稚園の教育と小学校教育の学びの連続性・一貫性について～事例児 A のあらわれから～

幼稚園での取り組みやあらわれが小学校のあらわれにどのようにつながったのかを探るために、事例児 A の観察を行った。分析に関しては、横浜市版アプローチカリキュラムの考え方をもとに、「協同的な遊びや体験の充実」「学びの芽を大切に活動の充実」「就学への期待を持つ活動の充実」の三つの柱を視点にして分類した。横浜市版アプローチカリキュラムでは、三つの柱を通して、幼児期から児童期にかけて養うことが必要とされている学びの基礎力「学びの自立」「生活上に自立」「精神的な自立」を養うことを目的としている。

「協同的な遊びや体験の充実」では、友達を意識し関わって遊ぶ経験や役割を意識し仲間の一員であることを理解する経験を幼稚園でしてきた事例児 A は、小学校の特別支援学級の中でも誘ったり誘われたりしながら、仲間作りをスムーズに行うことができた。また、「学びの芽を大切に活動の充実」では、生活の中で文字や数に興味を持ったり、手先を使った様々な活動を行ったりしてきた事例児 A は、小学校の授業に意欲的に参加し、文字については平仮名や片仮名を読んだり書いたりできるようになり、数については 10 までの数の足し算引き算までできるようになった。また、「就学への期待を持つ活動の充実」では、行事や就学時健診、体験入級などで小学校を訪れることにより、特別支援学級の友達や教師、教室を覚えることができ、小学校生活に期待を持ったり、小学校での自分の生活を予測したりすることに役立ったと言える。

三つの柱を視点にして分類を進めたときに、この柱に当てはまらない事例児 A のあらわれがあることに筆者は着目した。事例児 A が幼稚園での生活の中で、教師や友達に支援を受けながら荷物の整理や着替えなどを繰り返し行ってきたことは、「生活上の自立」を養う上で重要だったと言える。また、あいさつを交

わしたり、教師や友達に自分の思いを伝えたりする場面があったことは「生活上の自立」「精神的な自立」を養うことにつながったと言える。幼稚園で行ってきた取り組みは、学びの基礎力となる三つの自立を養うとともに、事例児Aの小学校生活への安心感、自信と意欲へとつながり、幼稚園から小学校へのよりよい移行につながったと考える（図3）。

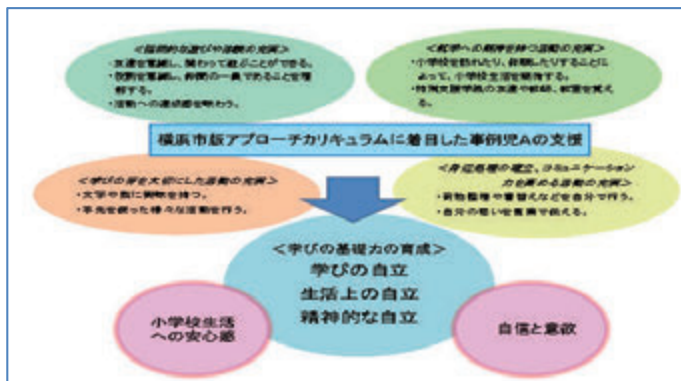


図3 横浜市版アプローチカリキュラムに着目した事例児Aの支援

7 総合考察

質問紙調査の結果、実習校での実践により、支援ツールによって「情報のつながり」を持たせ、支援システムにより「人のつながり」を持たせることがよりよい幼小連携へとつながることが見えてきた。情報だけが優先されるのではなく、支援システムによって幼稚園教師と小学校教師とがつながり、情報の再確認を行うことが重要であると考え。「人のつながり」が成立していると、特別な支援を必要とする子ども達について、就学前就学後に関わらず、実態や支援方法について、いつでも情報交換を行うことができる。子ども達にとって幼稚園から小学校への段差が小さくなり、よりよい移行支援につながると考える（図4）。

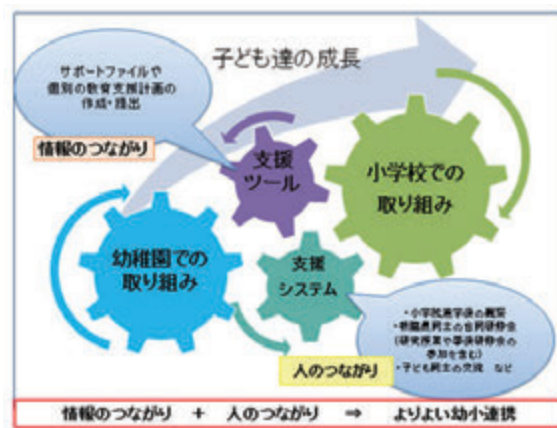


図4 情報のつながりと人のつながり

幼稚園から小学校への移行は、幼稚園の年長と小学校1年生の時期に熱心に取り組まれるべきであると考えがちである。もちろん、支援ツールや支援システムなどを利用して実際に支援をしていくのはこの時期である。しかし、幼稚園就園前からの発達過程や思春期以降を見通した支援も大切にしていける必要があると考える。そのためには、教育に関わる機関だけでなく移行に関わる様々な機関（保健福祉センターや発達障害者支援センターなど）が、相手の支援方法や役割を理解したうえで、子ども達にどんな段差が生じるかを考え、協力し合うことが重要だと考える（図5）。

【主要参考文献】

無藤隆 (2009)「幼小連携の充実に向けて現場が取り組むべきこと」、これからの幼児教育を考える、2009 年春号
赤塚光子(2007)「障害者の移行支援に関する現状と課題」
肢体不自由教育 第179号、4-9



図5 子ども達のライフステージから見た移行支援